デブリと実存のシグナル

東京藝術大学大学院美術研究科
博士後期課程美術専攻油画研究領域 壁画
学籍番号 1318908
吉野はるか

本論はデブリの芸術における解釈を主軸にし、デブリに対する作品制作、思考過程を論じるものである。それは、デブリは単なる瓦礫にとどまらない意味と可能性を持つものであると考えるからである。本論は次のような構成となっている。

第 1 章ではデブリの定義と問題提起について述べる。さらに、先行作品について述べる。一般的にデブリはゴミや不要なもの、瓦礫、破片に分類されているが、それだけにはとどまらない意味を持つ存在であることを提起する。そして、デブリとはかつてそれが存在した証、歴史を示すものであり、それら打ち捨てられた存在の記憶、その存在から発せられるシグナルを受け止めるべきものであると捉える。また、デブリに魅せられた先駆者について取り上げる。

第 2 章では街歩きとデブリについて、風景や道の上にあるものを通して制作された作品、『（仮に）石の記憶』、『ドローイング／ゴミスクラップ帳』について述べ、街の中に立っていること、都市との関係性について考察する。また 3 人の作家を取り上げ、デブリとの関係を見ることで、あらためて自身の作品との関係性に触れ、そこにはゴミ、瓦礫、排除されてきたものへの共感、自由な場所への逃避願望があることなどを示す。

第 3 章ではフライングディスクの実践―フライングディスクを投げ合うことと、郵送で飛ばすプロジェクト―について述べ、デブリの周回、浮遊という側面との関係性を考察する。またそこからスペースデブリの軌道周回性質をモチーフに誕生した作品『グッドラックデブリーズ』について述べる。

第 4 章では作品のキーワードであるオウムアムアと宇宙、それらとデブリの関係について考察する。2017 年にハワイで観測されたこの天体とデブリの可能性について考え、この考察と自身の滞在から着想を得て生まれた、作品『Trip in O’umuamua』について述べる。

第５章では火山調査から制作された作品『マールと光』を通して、地球の運動の過程によって作り出されるデブリについて考察し、作品の素材であるガラスや土器が引き起こす作用、そしてデブリとの親和性について述べる。デブリを表現する素材に焦点を当てて論述する。

第６章では作品『砂漠に水を流す』を紹介し、自身の作品制作手法について述べる。それは、移動という行為を繰り返す中で自身の所在を明らかにしようとする制作手法といえる。また、人新世の中で語られてきた現代の社会と環境を考えるトピックや哲学に触れ、思想面からデブリを考察し、デブリの持つ時間とその取り巻く環境について述べる。また、人新世という時代背景におけるデブリと芸術について述べる。

エピローグでは近未来のデブリの形、存在する場所について考える。そして、自身のデブリの存在について思考してきたことを振り返る。